

## The Safer, the Riskier:

### A Model of Bank Leverage and Financial Instability

京都大学 敦賀 貴之

日本銀行 加藤 涼

本稿は、Diamond and Rajan (2009)の銀行のモデルに Allen and Gale (1998)の議論を応用し、銀行の最適なレバレッジと金融危機の発生頻度に関する考察を行う。Diamond and Rajan (2009)では、Allen and Gale (1998)とは異なり、銀行の資産サイド（貸付）の構造も明示的にモデル化している。本研究では、両者のモデルを組み合わせ、マクロ経済における流動性不足が及ぼす金融危機の発生頻度への影響を考察する。

本稿のモデルでは、ある確率分布に従う家計の流動性選好が危機を発生させる。流動性選好が極端に大きいとき、多くの預金が引き出され、銀行はデフォルトに陥る。従って、家計の現在消費に対する選好が強い時には、銀行がデフォルトに陥る確率は通常上昇する。ところが、本稿では、 $\theta$ が「平均的に」小さくなるとき、銀行がデフォルトに陥る確率が逆に大きくなるうことが示される。これは、銀行が預金者の流動性選好が平均的には小さくなるために、銀行はレバレッジを高めて銀行のバランスシートを拡大し、大きなリスクをとるため、預金者の流動性需要が平均的にみてデフォルトを起こしにくくなっても、それを織り込んだ銀行のリスク・テイキング次第では、銀行がデフォルトに陥る確率が高まるためである。